

NJ 素流協 News

平成23年6月30日 第78号

平成23年6月30日発行・発行所 ノースジャパン素材流通協同組合 〒020-0024 盛岡市菜園1丁目3-6 (農林会館9階)
 TEL 019(652)7227 / FAX 019(654)8533 / http://www.soryukyo.or.jp/index.html

平成23年版森林・林業白書より

木材の需給動向と需要拡大への取組

本年5月末に発刊された「平成23年版森林・林業白書」は、3月の大震災発生時すでに編集作業が最終段階に入っていたと思われ、震災に関しては、冒頭「トピックス」で短くまとめられるにとどまっている。このことから木材需給動向等に関しては異なる展開もあると考えられるが、この点を含みつつ資料を見ることとする。

▽木材の需要

木材の需要は、平成8年以降減少傾向で、平成21年には対前年比19%減の6321万³mとなった。22年については実質国内生産がプラスに転じたことや経済対策等により住宅着工が前年を上回ったことにより、需要は増加すると見込まれている。

▽木材の供給

国産材の供給は、昭和39年の木材輸入自由化以降減少傾向が続い

てきたが、戦後造成された人工林資源の充実により、平成14年から増加傾向にある。一方木材輸入が需要減少や輸出国における資源的制約等により平成8年をピークとして減少傾向となっていることから、木材自給率は平成14年の18.2%を底として上昇しており、平成21年には27.8%になった。

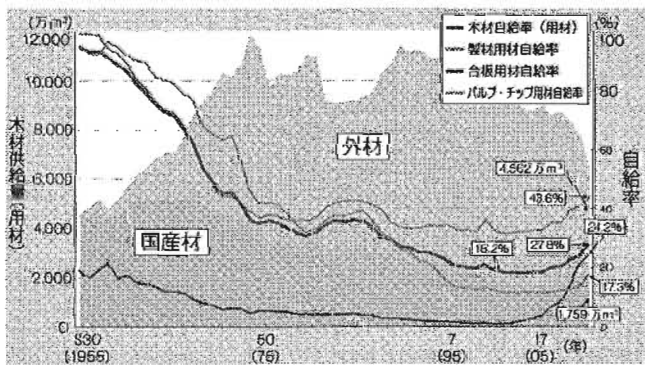


図1 木材供給量と自給率推移(林野庁「木材需給表」より)

今後は「森林・林業再生プラン」に基づく木材の安定供給と利用に必要な体制の構築が進むことにより、国産材の供給力が強化されることが期待される。

▽木材輸入

平成11年と21年の輸入量を形態別に比較すると、丸太については、ロシア材の大幅減少などから総輸入量が1655万³mから413万³mへ減少している。

製材については1508万³mから880万³mへ、パルプ・チップは3544万³mから2396万³mに減少している。合板等についてもインドネシアからの輸入が違法伐採対策による伐採制限などから減少したことで、818万³mから506万³mに減少した。

一方これまで実績のなかった中国からの輸入が合板製造業の発展により増加している。木材の輸入形態は、輸出国における丸太輸出規制や付加価値製品の振興政策により未加工の丸太から加工された製品にシフトしており、木材輸入

量全体に占める製品での輸入割合は88%となっている。

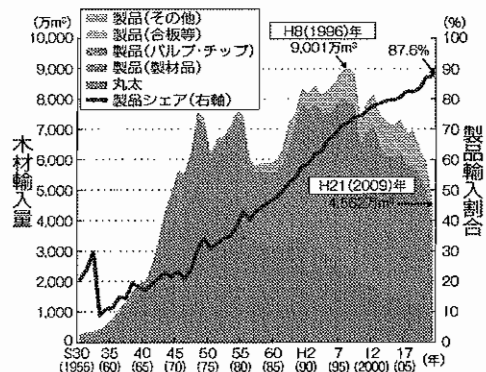


図2 木材輸入量推移(数量は丸太換算値)

▽木材需要拡大に向けた取組

我が国における木材需要の約4割が建築用材で、特に木造住宅の動向が木材需要全体に大きな影響を与える。木造住宅における木材使用量は一棟当り約0・20³m³/m²で、在来工法住宅における国産材の使用割合は3割弱にとどまっているため、更なる国産材利用の拡大が可能だと考えられる。

林野庁では、住宅メーカーや工務店等が必要とする製品を低コストで安定的に供給するため、「新流通・加工システム」、「新生産シス

テム」の取組を実施し、一方の住宅メーカーでも国産材利用の取組が拡大している。針葉樹合板の原料としても国産材の利用が急速に進展している。さらに木材生産・製材業者、販売業者、大工・工務店等が連携して、地域材を多用した家づくりを行う「顔の見える木材での家づくり」の取組や、地方公共団体による地域材住宅の普及に向けた取組も拡大している。

住宅以外の建築物では、昭和62年の建築基準法改正以降、木造の大規模建築物の事例が増加している。ただし公共建築物の木造率は建築物全体と比べて低位にとどまっている。平成22年5月「公共建築物等における木材の利用の促進に関する法律」が成立、10月から施行された。同法に基づき、過去の「非木造化」の考え方を「可能な限り木造化・木質化を図る」考えに大きく転換した。耐火建築物等の義務付けがない公共建築物については、積極的に木造化を促進することとなった。

▽エネルギー利用

平成14年の「電気事業者による新エネルギー等の利用に関する特別措置法(RPS法)」により、石炭火力発電所における木質バイオマスの混合利用が進んでいる。経済産業省では、「再生可能エネルギーの全量買取制度」を検討中で、バイオマスによる発電も対象とすることを検討している。また国内クレジット制度やオフセット・クレジット(J-V E R)制度により、木質バイオマス利用によるクレジットの取組も増加している。

木質バイオマスのエネルギー利用推進には未利用間伐材等の活用が不可欠であるが、その収集・運搬・チップ化はコスト高となる。また単位発熱量当たりの価格で見ると木質バイオマスは化石燃料と十分競合が可能であるが、燃焼機器の導入コストは化石燃料よりも高価となる。これらの課題と、安定的ペレット供給体制の整備や消費者向けサービスの充実等の課題に取り組むことが必要となる。

▽森林・林業再生プラン

農林水産省では平成22年1月から「森林・林業再生プラン」の実現に向けた具体的な改革の内容の検討を開始し、同年11月に最終とりまとめとして公表した。その骨子は次の通りとなっている。

1. 森林計画制度の見直し
 2. 適切な森林施策が確実に行われる仕組みの整備
 3. 低コスト化に向けた路網整備等の加速化
 4. 担い手となる林業事業者の育成
 5. 国産材の需要拡大と効率的な加工・流通体制の確立
 6. フォレスター等の人材の育成
- これらの改革により持続的な森林経営の確立と国産材の安定供給体制の構築を実現、「10年後の木材自給率50%以上」の目標達成を目指すこととしている。
- 以上、木材の需給動向と需要拡大への取組を中心にまとめた。東日本大震災により林業界も大きな被害と影響を受けたが、「この時をチャンスに変え自らが立つ」ことが正に求められるであろう。

一葉 樹木の病害虫 (13)

鉄砲虫(立木編)

鉄砲虫については、本誌69号で山土場や貯木場などで丸太につくオゾウムシを紹介した。また、マツにつくマツノマダラカミキリを66号、スギにつくカミキリ類については74号で紹介した。今回は広葉樹の生立木につく種類について説明する。

①ゴマダラカミキリ

多くの種類の広葉樹を加害するが、岩手県内では庭木や街路樹として植栽されているシラカンバへの被害が目立つ。地際部の幹内部を食い荒らし、成虫が脱出した後には直径1cm位の丸い孔ができる。集中的な被害により、根元から倒伏する場合もある。

②シロスジカミキリ

多くの種類の樹木を加害するが、最近では造林されたナラ類の被害が見られる。被害木は幹に異常な膨らみが見られ樹皮も荒れており、根元に細長い木屑が貯まっている。

③コウモリガ

スギ、ハンノキ類、ポプラ類からトマトやトウモロコシなどの農作物まで極めて多くの植物を加害する。全く健全な状態の植物に寄生し、樹木では幹の中心部に潜んで幹を一周するように甘皮(形成層)部を食害する。被害木は衰弱し、やがて被害部で折れてしまう。

共通して、被害は本来の自然環境と異なる環境に植えられた広葉樹に発生することである。以前早生樹として造林が奨励された改良ポプラ、コバハン(タニガワハシノキ)に多発した経緯がある。また、公園や街路樹に植えられているシラカンバ(中国では大きな問題になっている)や外国産のカエデ類の被害が目立つ。

最近進められている広葉樹造林地での被害が報じられている。針広混交林の造成には、従来から生育している樹木の活用が望まれる。

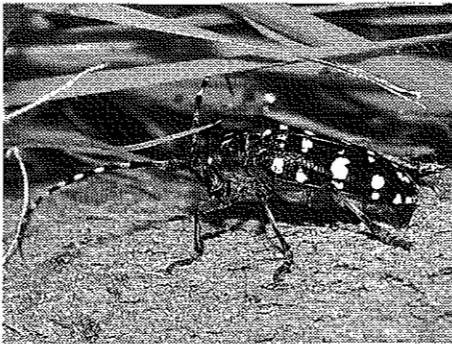


写真1 ゴマダラカミキリの成虫

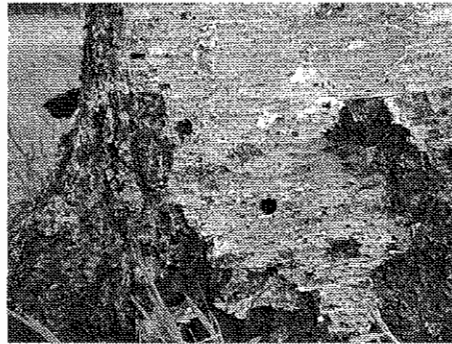


写真2 ゴマダラカミキリ成虫の脱出した孔



写真3 ゴマダラカミキリの被害で折れた木

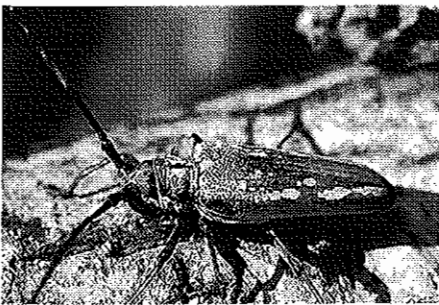


写真4 シロスジカミキリの成虫



写真5 シロスジカミキリによる被害木



写真6 コウモリガの成虫

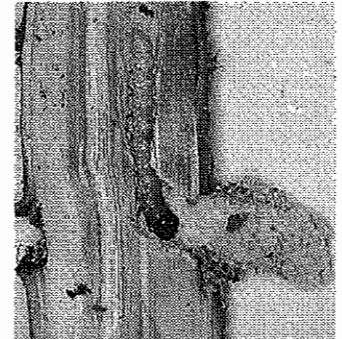


写真7 コウモリガの幼虫

作業道散策

15

ハナイカダ (花筏)

花筏、はないかだ、優雅な名前
の樹木である。広葉樹林に生える
落葉性の低木で、あまり目立たな
いが、これが6月頃に葉っぱの真
ん中に花を咲かせるというなか
か面白い性質を持つ。

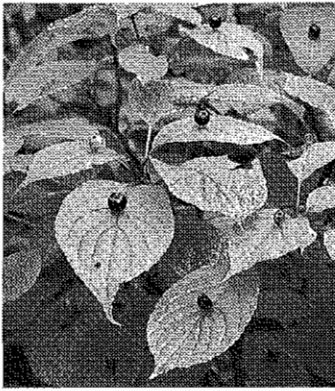


写真2 熟した実

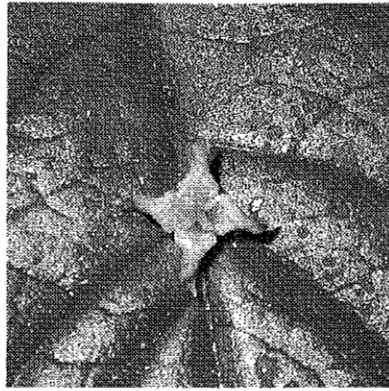


写真1 雌花

樹高は高くても2m程度で、主

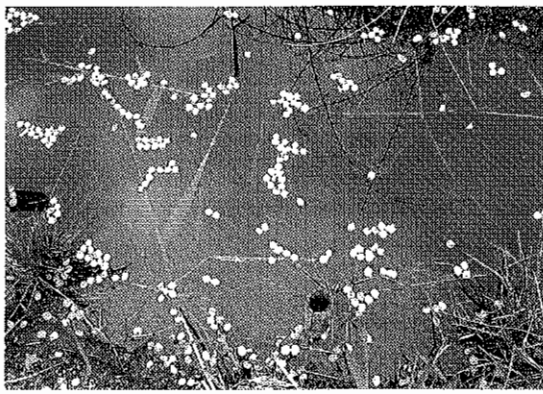


写真3 花筏

幹は無く、地際から多数が叢生し、
葉には光沢がある。花は小さく、
緑色で目に付きにくい。夏8月
に熟す光沢のある丸くて黒い実は、
甘みがあり食べられる。
花を船頭、葉っぱを筏と見て風
流な名が付いた。風流に因んで庭
木として植えられ、茶花としても
珍重される。
嫁の涙(葉を目、実を涙と見た)
の別名もある。その他、木ほうず
き、いぼな、黒い実をお灸に見て
継子の木という地方もある。

また、水面に散った桜の花びら
が、集まって流れる様を「花筏」と
呼び、俳句の季語になっている。

日本料理、和菓子、料亭、宿の
名前などに使われている。さらに
家紋のデザインにもなっており、
変わったところでは関西落語に大
関「花筏」が登場する。
三重県には、本当の筏にハナシヨ

ウブを植え付けて川に流す行事が
あり、梅雨時期の風物詩となつて
いる。鎌倉市の長谷寺の花筏は、
池に浮かべた筏でハナシヨウブを
栽培している。
芸能界を見ると、最近、「花筏」
と云う題名の歌が3曲(天童よし
み、長保有紀、岩本公水)も同時
に歌われている。

冗談欄

一石二鳥のグルメ

連日暑い日が続き、暑さのせい
か春の花粉症の辛さは忘れてしまっ
た。

新聞の特集で昔の行事で今は見
られなくなった事柄の一つとして
「虫下し」が載っていた。

今の若い人には何のことかわか
らないことだろうが、当時は、衛生
環境不良のため、皆が腹の中に寄
生虫がいた。しかも、食糧不足の時
代であり、貴重な栄養源を寄生虫
に奪われるので、痩せた人が多く、
今みたいにメタボなんて考えられ
なかった時代のことである。

腹の中にいる寄生虫を退治して
しまおうというのが「虫下し」であ
り、腹の中に虫がいるかどうかを
調べるのがマツチ箱での検便であつ
た。全員が虫下しの薬を飲まされ
たので、検便は不要であつたよう
な気がする。

虫下しの効果と人糞尿が肥料と

して使用されなくなったことから、
昭和50年代には日本人の腹の中に
虫は居なくなつたと言われる。
近頃の花粉症患者の増大は、腹
の中に虫がいなくなつたのが原因
であると唱える学者がいる。

この学者さん、自説を証明する
ために自分の腹の中でサナダムシ
を育てたことがあるそうで、虫と
同棲中には一人きりでも孤独感に
襲われることは無く、虫の寿命で
ある2年ほどすると、なぜか心に
物悲しいむなしさがよぎるときが
あり、虫の死を悟ることができた
そうである。

今飽食の時代でメタボや糖尿病、
花粉症が急増している。

そのうち、病院で「サナダムシの
踊り食い」が処方されるかもしれ
ない。

これぞ、一石二鳥の究極グルメ
である。

平成23年6月分の販売実績

- 1 合板用出荷量を前月と比較すると、スギが約1,860m³増加、カラマツが約1,020m³増加、アカマツが約560m³減少し、全体では約2,880m³増加している。昨年同月と比較すると、スギが約6,950m³減少、カラマツが約6,220m³減少、アカマツは約1,430m³減少し、全体では約14,590m³減少している。なお、これら合板用出荷量のうちシステム販売取扱量は前月より約460m³増加している。
- 2 その他（合板用以外）の出荷量は前月より約1,020m³減少、昨年同月より約3,750m³増加している。
- 3 今年度の年間計画量に対する1か月あたりの出荷量の割合（目標達成率）を25.0%とすると、今月の全体出荷実績は、計画数量を8.1ポイント下回る進捗状況となっている。

(m³)

樹種	長級(m)	当月出荷量			今年度累計			
		合板用	その他	計	合板用	樹種別割合	その他	計
スギ	2.0	2,518			7,709			
	4.0	1,847			2,536			
	計	(507) 4,365	(94) 4,118	(601) 8,483	(735) 10,245	56.3	(173) 11,840	(908) 22,086
カラマツ	2.0	2,349			6,360			
	4.0	754			1,290			
	計	3,103	1,425	4,527	(95) 7,650	42.0	(149) 4,422	(244) 12,071
アカマツ	2.0				270			
	4.0				10			
	計		287	287	(0) 281	1.5	(0) 2,399	(0) 2,680
その他針			23	23	21	0.1	82	103
広葉樹					0	0.0	140	140
合計		(507) 7,468	(94) 5,853	(601) 13,320	(829) 18,197	100.0	(322) 18,882	(1,151) 37,079
目標達成率(%)								16.9
計画量								220,000
バイオマス用針葉樹チップ材(単位:トン)				0				0

() はシステム販売取扱量(内数)

落穂拾い

日本人のうち、ある年代以上の人たちがこよなく愛した今は亡き女優高峰秀子さんが自著の中で、「優しくてイジワルで、利口でアホウで、お人好しでズルくて、と、こよなく複雑な人間を観察するのは面白い」といっている。また彼女は家庭の事情から上級学校には行かず、幼少の頃から子役として映画界に入ったことも、つとに知られていくことである。そのような境遇にあったので、「学校に行かなくても人生の勉強は出来る。私の周りには、善いもの、悪いもの、美しいもの、醜いもの、なにからなにまで揃っている」とも書いています。

なぜ高峰秀子さんの話を持ち出したかというと、つい先頃の国会を騒がせた内閣不信任案問題の過程で、鳩山由紀夫前首相が菅直人現首相を「ウソつき」「ペテン師」と呼んだことを思い出したからである。お互いに同志であった前総理が現総理をウソつき呼ばわりするという異常な状況を天下に晒した。心理学の世界に「ウソつきのジレンマ」というのがあるそうだが、「ウソつきのパラドックス(矛盾)」とも言おうのである。ある人が「私はウソつきである」と宣言したとき、これは果たしてウソか、ホントかという真偽の判断が問題となる。「私」がウソつきならば、宣言は真実を語ったことになり、「ウソつき」ではなくなる。逆に、ウソつきでないならば宣言はウソをついたこととなる。結局、この問題は永遠に矛盾が繰り返されることになる。

鳩山前首相が菅直人をウソつき呼ばわりをしたが、自身は米國普天間飛行場の「県外移転」発言で沖縄県民から「ウソつき」と非難された。「議員引退宣言」の撤回や母親からの巨額な「子供手当」の全資料を「国会で公表する」と答弁しながら、その約束を破ってきたことを国民はウソだったと考えている。一方の菅さんも対抗してか、われ負けじと、前の参議院選挙で「消費税10%上げ」を発言しては撤回し、退陣すると約束(見せかけ)しておきながら、なかなか辞めないなど、どっちもどっちである。「ウソつき」と呼ばれる人が、他者を「ウソつき」と呼ぶとき、二人ともそうなのか。それとも、どちらかはたまには真実を言うのか？

米大統領に「トラスティミー(信用してほしい)」と約束して裏切った行為もペテンに等しかった。その鳩山さんが菅直人をペテン師呼ばわりするとき、いったいどちらがどれだけ信用できるのか。これらを「鳩・菅のジレンマ」であるという人がいた。

日本国のトップ二人がこんな体たらくの状況で、国民はいつたいどうすればいいのか。ある政治家が別のことで「バカ足すバカ足すバカは、やっぱりバカ」と言ったというが、バカとウソつきとペテン師では少しづつ意味が違うものの、政権のウソと真実とを見極めて、一刻も早く正常な政治を復活させなければ、日本国全体がダメになってしまうと多くの国民が恐れ、嘆き、怒っている。

泉下で高峰秀子さんは、これまで述べてきたお二人について「バカで、ウソつきで、ペテン師という複雑な人間を観察するのは面白い」と言いつつ、人生の勉強をしているかもしれない。合掌。